

日本ロレンス協会 50周年記念大会報告——2019年6月8日, 9日

今年度の大会は50回目の記念大会で、研究発表に加えて3本の特別企画を設け、大会2日目の日曜日も午前から午後まで充実したプログラムが組まれました。会場は慶應義塾大学日吉キャンパスです。土曜日のプログラムは2人の大学院生の発表で幕を開けました。



ロレンスの代表的な作品である *Sons and Lovers* と *The Fox* のテキストを丁寧に読み込んで分析した研究発表でした。

特別企画のひとつ目は、Michael Bell ウォリック大学名誉教授と、Sean Matthews ノッティンガム大学准教授による基調講演「ロレンスとモダニズム」です。



Bell 先生の講演は“Lawrence and the Aesthetics of Modernism”, Matthews 先生は“T. S. Eliot and D. H. Lawrence: ‘Towards the Door We Never Opened’” という題目で話をされ、満員となった会場では両講師の密度の高い講演を受けての質疑応答も大いに盛り上がりました。

★

★

大会 2 日目は 2 本の研究発表で始まりました。



テキストの表現を細かく検討しつつ *Lady Chatterley's Lover* を読み解く発表でした。



「歓待」という主題からロレンスを読む新たな切り口が示されました。

特別企画2番目は、ロレンスの伝記の決定版とも言える『評伝 D・H・ロレンス』の著者である井上義夫一橋大学名誉教授による講演「D・H・ロレンスの伝記資料とその収集」です。



所謂ロレンス神話を精緻な歴史的研究によって解体し、作家 D・H・ロレンスがいかに誕生したのかを世界に先駆けて明らかにされた業績にもとづく講演からは、文学研究が単にテキストを読むにとどまらず、文学が歴史の中でどう作られ受け入れられるものであるかを追究する学問でなければならないことをあらためて認識させられました。

記念大会を締めくくる特別企画は「21 世紀の文明社会のゆくえ——D・H・ロレンスとノルベルト・エリアス」です。



エリアスを長く研究してこられた大平章先生は現代世界を考える際のエリアスの重要性を、**Julian Manning** 先生はエリアスの思想を形づくる理論的枠組みについて詳細かつ分かりやすくお話しされ、鳥飼真人先生はロレンスの哲学的思考の発展をたどりつつ現代文明の問題に鋭く切り込まれました。

開催校委員の武藤浩史先生、近藤康裕先生をはじめとする慶應義塾大学のみなさまのおかげで、50周年記念大会は滞りなく2日間のプログラムを終えることができました。



来年度の第51回大会は6月20日、21日に開催されます。
会場の高知県立大学でお会いしましょう。